

長谷川匡俊著

『近世浄土宗・時宗檀林史の研究』

田中洋平

近世仏教の実態を描出するうえで、寺檀制度は欠くことのできない視点である。前代とは異なり、全国の隅々にまで寺院が展開していく契機となったのは、寺請の必要性に起因する時代的要請であったといえるだろう。寺院の建立過程や寺檀制度の内実を問うことは、近世宗教史研究のみならず、村落史や生活史など、広く研究者の関心事である。

他面において、そうした寺院に住する僧侶はいかに養成されていたのだろうか。この点に関しては、知見の深化が充分に図られてこなかった。あるいは、そうした機能を担う檀林寺院がいかに運営されていたのか、という点についても同様である。住持による寺請や宗教活動が近世の地域社会において果たした役割の大きさを考えると、こうした研究動向は大きな欠落として

浮上する。

本書は、浄土宗関東十八檀林のひとつ、龍澤山大巖寺の住職として同寺を運営しつつ、半世紀の長きにわたって近世仏教の有りようを追究してきた著者が、右のような問題意識のもと、それに対する回答を得ようとした成果である。

以下に本書の構成を示す。なお、副題は紙幅の関係上省略し、括弧内に初出年を記しておく。

序

第一部 関東浄土宗教団の末寺統制と地

方檀林の歴史的展開

第一章 関東浄土宗教団の末寺統制と

学寮運営（一九八五年）

第二章 下総国生実大巖寺檀林の学寮

運営と民衆教化（一九七一年）

第三章 常陸国江戸崎大念寺檀林の学

寮運営と民衆教化（一九七四年）

第四章 武蔵国川越蓮馨寺檀林の学寮

運営と教育の質をめぐる課題

（二〇一六年）

第五章 常陸国瓜連常福寺檀林の学寮

運営と本末関係の構造的特質

（一九七六年・一九七八年）

補論1 地方檀林の経営体質をめぐる
基礎情報（一九七二年）

補論2 檀林教育における法問と講釈
（一九八八年）

第二章 檀林修学者の「入寺帳」の分
析からみえてくるもの

第一章 増上寺所蔵「入寺帳」と修学
者数の動向（一九八二—一九八
四年）

第二章 光明寺所蔵「入寺帳」の分析
からみた地方檀林の実況（一九
七五年）

第三章 名越派二檀林の実況（一九九
三年）

第三部 時宗の学寮

第一章 学寮の設置と「大衆帳」から
みえてくるもの（一九八二年・
一九七四年）

第二章 学寮生活と僧侶の資格・昇進
（一九八二年・一九七四年）

付録 史料紹介（一九七四年）

結語

一見して、息の長い研究である。著者は
一九七一年から二〇一六年まで、近世仏教
史、仏教福祉史に関する論文を執筆しなが

ら、常に檀林寺院への関心を向け続けてき
たことに気付かされる。

次に各章の内容を確認していく。

序では、研究史を整理するとともに、本
書の基本的立場を明確にしている。檀林の
機能としてまず思い浮かべるのは、僧侶養
成機関としての側面であろう。ところが著
者の関心はこれにとどまらない。檀林は、
僧侶の養成を主とする教育以外にも、地方
の本山、触頭としての役割、そして民衆教
化をも担っている。序ではこうした点を明
示的に指摘している。いわば、檀林の機能
である。

第一部は五章で構成されている。第一章
は、以下に続く第二章から五章までの総論
としての意味合いを強くもつ。第二章では
大巖寺、第三章は大念寺、第四章は蓮馨寺、
第五章は常福寺というように、個別の檀林
寺院に関して論究を深めている。特に第三
章では、修学体制の弛緩や僧侶の質的低下
を檀林寺院や末寺の困窮化と関連させて論
じている点が興味深い。序で述べられてい
た檀林寺院の総体的把握という分析視角を
十分に活かしている。

である。

結語では、本書の内容を総括している。

例えば『世事見聞録』の記述にみられる
ように、近世の仏教教団は、同時代の史料
でも批判的に語られることが多い。そうし
た視線が少なからずこの時代の僧侶に向け
られていたとするならば、各仏教教団でも
修学の課程を整備する必要性に迫られていた
と考えるのが適当であろう。また、僧侶の
存在がその時代の社会的所産であるとすれ
ば、これを養成する各檀林の実態を明らか
にするためには、それらを取りまく社会経
済的な背景を分析に組み込む必要が生じて
くる。本書の特長は、行論を展開するにあ
たり、こうした点にまで十分な目配りがさ
れている点であろう。

長い年月のなかでそれぞれの学会誌や研
究紀要に掲載された論考が、本書にまとめ
られることで利便性を増している。加え
て、史料引用にあたり、良質の史料にこだ
わって結論を導き出すという著者の研究姿
勢は、評者を含む後学にとって得るところ
が大きい。

（たなか・ようへい 淑徳大学人文学部准教授）
（A5判、五二二ページ、二二二〇〇円、法蔵

伴って地方檀林の振興を図る目的から、江
戸檀林への入寺者数に制限があったことを
明らかにしている。また、入寺の年齢や礼
銭の金額といった基礎的な様相についても
言及している。第三章では、浄土宗教団と
は教団の構造上一線を画したとされる名越
派について、前章までと同様に入寺の実態
を詳らかにしている。

第三部は第二章と付録からなり、論文はい
ずれも時宗教団の僧侶養成に焦点を当てて
いる。時宗は、遊行上人による廻国という
他宗派にはみられない特徴を有する教団で
ある。『遊行日鑑』の刊行に代表されるよ
うに、遊行上人の廻国性に注目した研究に
は進展がみられるものの、著者が指摘する
ように、同宗がどのように僧侶を養成した
のか、といった点については、いまだに研
究の余地を残している。

第三部に収録された二本の論文は、学寮
の設置時期やそこでの生活と修学の様子、
組織と財政などに至るまで、その内容を総
合的に明らかにしている。付録は時宗一連
寺（山梨県甲府市）に所蔵されている史料
で、いずれも延享五年（一七四八）の「学
寮条目」と「両本山条目」を翻刻したもの

第五章で取りあげられている常福寺の分
析では、同寺が所在する水戸藩の学問・宗
教政策とも関連させて考察を展開してい
る。社会経済史的アプローチとともに、藩
政史をも視野に入れつつ、地方檀林寺を取
りまく環境に踏みこんだ論考である。

補論はふたつの論考から成り立ってい
る。補論1では、檀林における年中行事を
紹介するとともに、特に寺院の経済基盤に
焦点を当てる。補論2では、檀林での教育
に関してその授業形態に注目し、法問と講
釈から検討している。

第二部は、三章から構成されている。第
一章と第二章は、それぞれ増上寺と光明寺
に残されている「入寺帳」の分析を主とし
ている。これは、檀林に入寺を許された所
化大衆の学簿を指しており、入寺の種類
やその資格、入寺手続きなどを詳細に知る
ことができる史料である。特に増上寺に
は、浄土宗関東十八檀林の筆頭であったこ
とから、同寺のみならず各檀林から提出さ
れた「入寺帳」も保管されている。

この分析からは、増上寺を中心とした
五ヶ寺の江戸檀林が地方檀林に比べて多く
の入寺希望者を集めていたこと、それに